

## 現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討 (2)

— 生活満足度と協調的幸福感を用いて —

南 学

### 要 旨

本研究では、現代の若者がもつ幸福観との関連から生活満足度と協調的幸福感を測定することを目的として検討を行った。結果は、幸福観によって若者を3群に分けたところ、生活満足度と協調的幸福感において「現状満足群」はほとんどの因子で低く、「全追求群」が高い評価となっていた。

これらの結果から、古市(2011;2013)が提唱した若者の価値観の傾向と幸福感を結びつけた解釈は実証的根拠に乏しいことが示唆された。

### 問 題

現代の若者にとって、日本の状況は決して恵まれたものとはいえず、明るい未来も描きにくいと考えられる。にもかかわらず、彼らの生活満足度が高いことが社会学を中心に大きな関心となっている(古市, 2011; 2013)。古市(2011; 2013)は、若者と同じように高齢者の幸福度や生活満足度が高いことを指摘し、若者も同様に、将来に希望がもてないがゆえに、現状に満足しているという逆説的な幸福感の仮説を提唱している。ただし、新たな直接的なデータを示したわけではなく、いくつかの調査結果からあくまでも解釈として提出しているにすぎない。

この点に関して、南(2015)は、大学生の幸福に対する価値観と幸福感の関係について検証し、将来に無関心な「現状満足」群の若者が必ずしも主観的幸福感が高いとはいえないことを示した。また、南(2018)は、周囲の友人との良好な関係を維持することで幸福感を高めているという仮説(古市, 2013)についても必ずしも高い幸福感につながらないことを示した。この結果から、古市(2011; 2013)の仮説は実証的には支持されないとはいえる。

ところで、古市(2011)をはじめとする社会学の研究では、「幸福」を論じながらも「生活満足度」を指標とすることが多い。実際この議論の発端となった「若者が幸福である」という調査結果(「国民生活に関する世論調査」(内閣府, 2010))も「生活に対する満足度」の回答結果である。また、同様に古市(2011)が挙げた「日本人の意識」(NHK放送文化研究所, 2010)でも「生活に対する満足感」の結果である。ただし、「世界青年意識調査」(内閣府, 2004)と「中学生・高校生の生活と意識調査」(NHK放送文化研究所, 2012)では「幸福感」に対する回答結果である。こうした指標が混在しているところから少なくとも古市(2011)は、「生活満足度」と「幸福感」は同じものを測っている指標であると考えていることが推測される。

しかし、心理学の立場では、この2つを直ちに同じものにとらえることはできない。なぜなら、「満足度」として尋ねられた場合、物質的な豊かさの点で言えば、現代社会はかなり「満足度」が高いと

考えられるため、「満足している」と回答する者は多くなると考えられるからである。他方、「幸福度」として尋ねられた場合、心理的な豊かさなどを思い浮かべた場合、「幸福である」と回答する者は減るのではないかと考えることができる。すなわち、幸福であるとはいえないが、(生活や物質的には)満足していると考える者が一定数いると思われる。なお、南(2015;2018)では、主観的幸福感尺度(曾我部・本村, 2010)を用いて測定しており、生活満足度について測定していない。

また、上で挙げた意識調査では、「生活に満足していますか」や「幸福ですか」というように、1項目の回答を集計している。この点も心理学の立場からは、かなり乱暴な指標であると考えられる。満足感や幸福感などは多様な観点から構成されるものであるため、1項目ではなく、複数の項目からなる尺度の得点として測定する必要があると考える。

そこで、本研究では、古市(2011;2013)と南(2015;2018)の結果の乖離について明確な結論を下すため、測定にあたっては複数の測定項目からなる心理尺度を用い、特定の項目の回答に依存しない指標を用いることとする。研究1では、鈴木(2002)の生活満足度尺度を用いて検討する。この尺度は、全般的満足感、家族関係の満足感、友人関係の満足感、学校生活の満足感といった多様な領域の満足感を測定できる。また、研究2では、Hitokoto & Uchida(2015)の協調的幸福感について検討する。協調的幸福感とは、西洋の個人主義文化に対し、東洋の集団主義文化が意味づける幸福感を含んだ概念であり、周囲の人との関係性に関する幸福感を測定するものである。従来幸福感にはこうした観点は含まれていない。もし本研究で用いた主観的幸福感では測定しきれないものが「若者の幸福感」の正体であるならば、西洋的な価値観とは異なる幸福感なら測定できる可能性がある。

なお、本研究では、「現代の若者」を検討するにあたり、以下のような方法を用いることとする。すべての若者が「現代の若者」にあてはまるわけではなく、一部の若者にそうした特徴があると考えられる。そこで、本研究では、HEMA尺度(浅野・五十嵐・塚本, 2014)をもとに調査参加者を分類することにする。HEMA尺度は、人が日常生活においてどのようなことを追求するのかという点に関して、喜びを達成することを「幸せ」とみならず快楽主義 *hedonism* と「よく生きること」を「幸せ」とみならず幸福主義 *eudaimonism* の観点から、測定をおこなう心理尺度である。このHEMA尺度では、くつろぎ追求、幸福追求、喜び追求の3因子が得られている。これによって、日常生活においてなにを追求するかという動機づけあるいは価値観や生き方を測定することができる。南(2015;2018)はこのHEMA尺度をもとに、現代の若者の生き方について検討し、主観的幸福感や友人関係との関係について検討している。とくに、HEMA尺度をもとに、クラスタ分析をおこない、全般的に高い全追求群、自身の成長などの幸福追求が低い現状満足群、のんびりとすることを追い求めるくつろぎ追求が低い向上志向群に分かれることを見出している。このうち現状満足群は私生活主義得点が高く将来に関心がないという特徴を持ち、対照的に向上志向群は自己の成長に関心を持ち、将来を志向する群であることが見出されている(南, 2015)。また、南(2018)では、現状満足群において内面的人間関係得点が低くなることと、人間関係希求型として気心の知れた人たちとの関係をより大切に維持型の人数が多くなることを見出されている。こうした特徴から、現状満足群は古市(2011)が示している「現代の若者」像の特徴を備えていると判断できる。したがって、このクラスタ分析を踏襲し、クラスタ間の比較を行うことで、「現代の若者」の生活満足度や協調的幸福感について検討することが可能であると考えられる。

## 研究 1

### 目 的

本研究では、南 (2015 ; 2018) では検討されていなかった生活満足度を測定し、「現代の若者」群の生活満足度について検討を行なう。

### 方 法

**調査参加者** 教養教育の心理学概論を受講する大学生のうち、欠損値がなかった 120 名。

**質問紙の構成・手続き** 日本版 HEMA 尺度 (浅野・五十嵐・塚本, 2014)、生活満足感尺度 (鈴木, 2002)、主観的幸福感尺度 (曾我部・本村, 2010)。

**調査方法** 前期初回、第 4 回に分けて調査をおこなった。初回は日本版 HEMA 尺度と主観的幸福感、第 4 回は生活満足感に回答させた。分けて調査をおこなった理由は、類似した項目が含まれており、混乱をさけるためであった。

### 結果・考察

まず各尺度の記述統計量を Table 1 に示した。また、各尺度間の相関を Table 2 に示した。「幸福追求」と「喜び追求」は、「全般的な生活満足感」と正の相関を示した。また「くつろぎ追求」をのぞきすべての指標が主観的幸福感と有意な正の相関を示している。

次に南 (2015 ; 2018) に準じて HEMA 尺度の各因子得点をもとにクラスタ分析 (Ward 法) をおこなった。3 群に設定したところ、Figure 1 のような結果が得られた。クラスタ 1 は全体的に得点が高く、クラスタ 2 は幸福追求で得点が低く、クラスタ 3 はくつろぎ追求で得点が低くなっていた。この特徴

Table 1 各尺度の記述統計量 (研究 1)

	平均	標準偏差
HEMA 尺度 (7 段階)		
くつろぎ追求	4.98	1.25
幸福追求	5.39	0.93
喜び追求	5.78	1.05
生活満足感尺度 (5 段階)		
全般的満足度	3.77	0.77
家族関係に対する満足度	4.13	0.62
友人関係に対する満足度	4.03	0.52
学校における満足度	3.70	0.74
主観的幸福感 (4 段階)		
	2.94	0.47

は南（2015；2018）で得られたクラスタと特徴が非常に類似しており、それぞれ全追求群、現状満足群、向上志向群と命名された（全追求群 39 名、現状満足群 35 名、向上志向群 46 名）。

これら 3 群における主観的幸福感と生活満足度の得点をそれぞれ Figure 2, 3 に示した。主観的幸福

Table 2 各尺度の相関分析（研究 1）

	くつろぎ 追求	幸福追求	喜び追求	全般的 満足感	家族関係 満足感	友人関係 満足感	学校生活 満足感	主観的 幸福感
くつろぎ 追求	1	-.054	.303**	-.190*	.067	-.005	.001	-.079
幸福追求		1	.374**	.334**	.179*	.133	.136	.281**
喜び追求			1	.274**	.034	.227*	.175	.344**
全般的 生活 満足感				1	.366**	.607**	.575**	.664**
家族関係 満足感					1	.332**	.290**	.278**
友人関係 満足感						1	.406**	.385**
学校生活 満足感							1	.407**

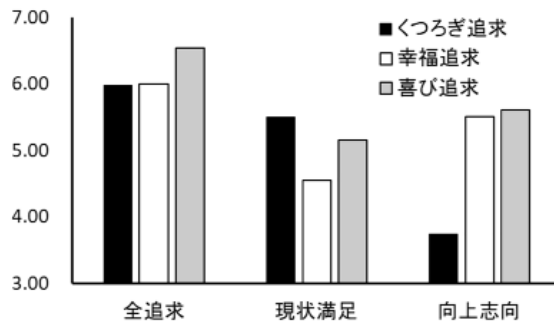


Figure1 各クラスタの HEMA 尺度得点（研究 1）

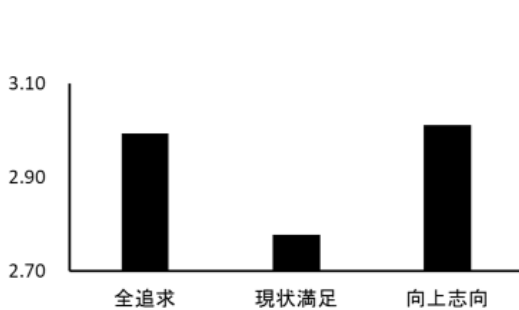


Figure2 各クラスタの主観的幸福感

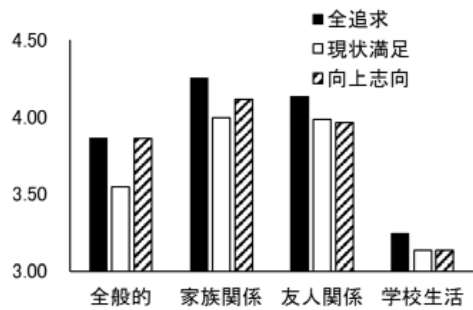


Figure3 各クラスタの生活満足度

感について分散分析を行ったところ、傾向差が見られた [ $F(2,119) = 2.87, p < .10, \eta^2 = .02$ ] ので、試みに下位検定をおこなったところ、現状満足群と向上志向群の間に有意差が見られた。次に、生活満足度の各因子についてそれぞれ分散分析を行ったところ、いずれも有意ではなかったが、現状満足群が高くなるという結果も得られていない。

研究1の結果からは、古市 (2011; 2013) が指摘するような「現代の若者」像が現状満足群において見出されている。このクラスタは「自分自身の力を最大限に生か」したり、「技術の向上、学習 (中略) を追求すること」に関する得点が低いのが特徴で、「くつろぎ」や「喜び」を追求するのが特徴である。しかし、この群の主観的幸福感や生活満足度がとくに高いという結果は得られず、むしろ低めになるということが研究1でも確認された。

## 研究2

**調査参加者** 研究1とは異なる大学生で、欠損値がなかった79名。

**質問紙の構成・手続き** 日本版 HEMA 尺度 (浅野他, 2014)、生活満足感尺度 (鈴木, 2002)、協調的幸福感尺度 (Hitokoto & Uchida, 2015)。

**調査方法** 前期初回、第4回に分けて調査をおこなった。初回は日本版 HEMA 尺度と主観的幸福感、第4回は協調的幸福感に回答させた。分けて調査をおこなった理由は、類似した項目が含まれているため、混乱をさけるためであった。

## 結果・考察

まず各尺度の記述統計量を Table 3 に示した。また、主観的幸福感と協調的幸福感間の相関は  $r = .500, p < .01$  であった。

次に南 (2015; 2018) に準じて HEMA 尺度の各因子得点をもとにクラスタ分析 (Ward 法) をおこなった。3群に設定したところ、Figure 4 のような結果が得られた。研究1と類似したクラスタとなっているため、全追求群、現状満足群、向上志向群と命名された (全追求群 36名、現状満足群 17名、向上志向群 26名)。

Table 3 各尺度の記述統計 (研究2)

	平均	標準偏差
HEMA 尺度 (7段階)		
くつろぎ追求	5.06	1.20
幸福追求	5.56	0.88
喜び追求	5.78	1.05
主観的幸福感 (4段階)		
	2.96	0.52
協調的幸福感 (5段階)		
	3.63	0.61

これら3群における協調的幸福感の得点を Figure 5 に示した。協調的幸福感について分散分析を行ったところ、有意な差が見られ [ $F(2,76)=4.24, p<.05, \eta^2=.10$ ]、下位検定の結果全追求群 - 現状満足群間に有意差が見られた。

研究2においても、現状満足群において古市（2011；2013）が指摘するような「現代の若者」像が見出されている。しかし、この群の主観的幸福感や生活満足度がとくに高いという結果は得られず、むしろ低めになるということが、研究1に続きあらためて確認された。

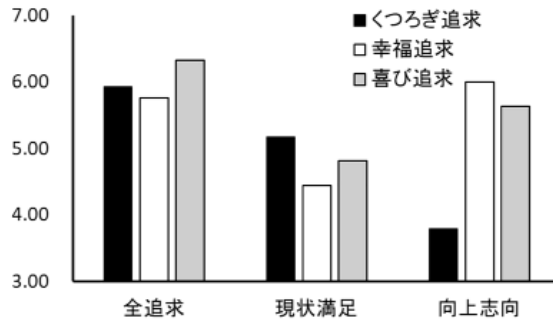


Figure4 各クラスターの HEMA 尺度得点 (研究 2)

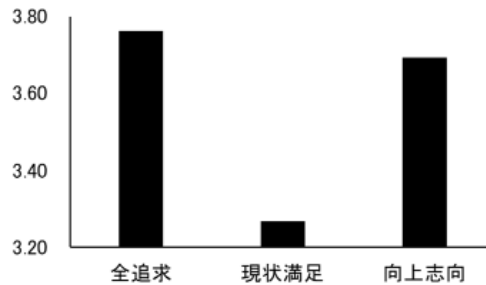


Figure5 各クラスターの協調的幸福感

## 全体的考察

本研究では、「現代の若者」像を反映していると考えられる現状満足群について、研究1では生活満足度との関係について、研究2では協調的幸福感との関係について実証的に検討を行った。結果は、いずれにおいても現状満足群における指標は他の群と比べて、むしろ低いというものであった。

現状満足群は、自身の成長や能力を発揮することなどを求めず、私生活主義得点が高く、将来に関心がない（南，2015）という特徴を持っていることから、古市（2011；2013）が指摘する「現代の若者」像の特徴を備えているといえる。しかし、この現状満足群の主観的幸福感や生活満足度、協調的幸福感がむしろ低くなるということは、古市（2011；2013）の解釈を支持しない。よって古市の仮説は根拠に乏しく、妥当性を欠いていると結論づけることができる。南（2015；2018）と本研究からは、将来が明るいとは思えない時代に若者が幸福と感じていることの原因を「現代の若者」の気質によ

て説明しようという考え方は不適切であるといえることができるだろう。

素朴に考えるならば、現代の日本は、比較的物質的に恵まれており、生活しやすく、インターネットやスマートフォンなどの普及によりその便利さを享受できる若者たちが幸福と感じるのは自然なことであると思われる。ここに日本の将来の見通しを絡めること自体が不適当な問いであると考えべきだろう。今後は、若者をとりまくさまざまな要因がそれぞれどの程度幸福感に影響するのかという観点から実証的に検討を進めていく必要があると考えられる。

## 引用文献

- 浅野良輔・五十嵐祐・塚本早織 (2014). 日本版 HEMA 尺度の作成と検討—幸せへの動機づけとは— 心理学研究, 85, 69-79.
- 古市憲寿 (2011). 絶望の国の幸福な若者たち 講談社
- 古市憲寿 (2013). 日本の「若者」はこれからも幸せか アステイオン, 79, 88-102.
- Hitokoto, H. & Uchida, Y. (2015). Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. *Journal of Happiness Studies*, 16, 211-239.
- 南 学 (2015). 現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討 三重大学教育学部研究紀要, 66, 171-178.
- 南 学 (2018). 現代の若者の価値観と友人関係 三重大学教育学部研究紀要, 69, 221-227.
- 内閣府 (2004). 第7回世界青年意識調査 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当)
- 内閣府 (2010). 国民生活に関する世論調査 内閣府大臣官房政府広報室 (世論調査担当)
- NHK 放送文化研究所 (2010). 日本人の意識 NHK 出版
- NHK 放送文化研究所 (2012). NHK 中学生・高校生の生活と意識調査2012 NHK 出版
- 曾我部佳奈・本村めぐみ (2010). 青年期における大学生の主観的幸福感—その影響要因の探索に向けて— 和歌山大学教育学部紀要: 教育科学, 60, 81-87.
- 鈴木有美 (2002). 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康—共感性およびストレス対処との関連— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 49, 145-155.

## Youth's sense of value and happiness(2): subjective well-being scale and interdependent happiness scale

Manabu MINAMI

### Abstract

The present study examined subjective well-being score and interdependent happiness score from youth's sense of happiness outlook. Results revealed that "satisfied with state" group was the lowest, and "all-direction require" group was the highest in subjective well-being score and interdependent happiness score.

Results suggest that Furuichi(2013)'s 'Happy Youth' Hypothesis has little empirical evidences.